

## 「東室蘭」

考えてみると、はじめて北海道へ行ったのは5年近く前になる。今回北海道へ行ったのは、それ以来のことだった。

5年前のときは、上野からの夜行列車の北斗星にはじめて乗ったときでもあった。北の方へ向かう列車に乗ること自体、あまり機会のないことだった。岩手や秋田も行ったことがないのに、はじめてでいきなり北海道なんだからなおさらのことだった。列車に乗ろうとホームへ行くと、駅の行き先表示板のところに「札幌行き」と書いてある。あたりまえのこと、といえばあたりまえのことなのだが、これからなにか知らない土地へ行くんだ、という思いが強くなったのをよくおぼえている。

列車が上野を出てしばらくすると、車掌さんが途中止まる駅の案内をはじめ。途中17個ぐらいの駅に止まるので、それを順番に到着時刻といっしょに案内をしてくれる。「大宮、17時15分。宇都宮、18時11分。・・・」といった具合だ。ずいぶんたくさん駅の駅を言っていたが、一つだけ、今でも頭に残っている駅がある。

「東室蘭、7時9分。」

この駅名を聞いたときなぜか、ああ、これから北海道へ行くんだ、という思いが、はじめて具体的になったようにおぼえている。初めて耳にする駅名はたくさんある。でも「函館」でも「登別」でも「札幌」でもない。「東室蘭」だった。不思議なものだ。この聞き慣れていなかった「東室蘭」という音節が、僕にとっての北海道の象徴のようだった。本当にわくわくする駅名だった。

それから5年、2回目の北海道だった。今回は上野から北斗星ではなく、まず青森まで夜行で行き、そこで大阪からやってくる函館行きの夜行列車の日本海に乗り、函館からさらに特急で札幌へ向かう、というコースだった。朝、青森へ着いても、まだ北海道へ行くという実感がわかない。日本海に乗り、青函トンネルをぬけて函館へ着いても、まだ北海道へきた、という実感がわかない。そこから特急に乗り、車内放送で「途中止まります駅は、・・・東室蘭」ときたところで、ああ、北海道へきたんだ、と思った。不思議なものだ。

でも、このとき聞いた「東室蘭」は、5年前の「東室蘭」とはなにか違った駅名に聞こえた。たしかに北海道へきた、ということを実感した駅名だったのだが、前のときほど、わくわくしない。なぜだろう。やはり前のときは、「はじめて行く北海道」の象徴だったからだろうか。

その後、今回はじめて行く土地もいくつかあった。もちろん、はじめて耳にする駅名もあった。しかし結局今回は、はじめてのときの「東室蘭」ほどわくわくできる地名には出会えなかった。

こうして、いろんなところへ行けば行っただけ、「東室蘭」には出会えなくなっていくのだろうか。

そう思うと、ちょっとさみしくなった今回の北海道だった。